

Shakespeare における gallant の用法

内藤 亮一

The Usage of “Gallant” in Shakespeare

Ryoichi NAITO

E-mail : naitoh@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：ギャラント，シェイクスピア，用法，騎士道

keywords : gallant, Shakespeare, usage, chivalry

はじめに：gallant が孕む 2 重性

gallant を試しに今日のネットの辞書で引いて見ると、形容詞で adj. 1. Smartly or boldly stylish; 2. Valiant; 3. Stately, majestic; 4. a. Courteously attentive especially to women; chivalrous. b. Flirtatious; amorous などの意味がでてくる。¹ 服装などのスタイルが粋で、女性に懇懇なという意味である。形容詞では「勇敢な (valiant)」という意味もあるものの、名詞にその意味は記載されていない。n. 1. A fashionable young man. 2. a. A man courteously attentive to women. b. A woman's lover; a paramour. おそらく、今日のこの言葉のイメージは、この辞書のように「勇敢な」というよりは流行の先を行く洒落者のそのほうが強いであろう。今ならイケメンというだろうか。それ (gallant) は一方で一部の男性を魅了すると同時に、一方では軽薄で眉を顰めたくなる男性のイメージでもある。そのイメージには、かつての強くて華麗で女性に優しいという理想の騎士像が反映されていると同時に、それらを表層的に模倣するだけの洒落者のイメージが重なってくる。この2つの意味の起源はどこにあるのか。そこから疑問は始まる。

この重層的な gallant なる男性イメージを解説するには、これらの重層性が顕著に現れる近代初期英国の gallant のイメージに遡って考察する必要がある。とくに、社会的な価値観や流行が映し出される演劇に表象された gallant のイメージを調べることから、当時の gallant のイメージを探ることができであろう。本稿はこの、gallant のイメージを追うために、まず近代初期英国における gallant の辞書的意味と、この時代の中心的劇作家である

Shakespeare の gallant の用法について調べ、gallant 探求の出発点とすることを狙いとする。

近代初期英国において、gallant が見せびらかす服装とは階級・ジェンダー・職業など個人のアイデンティティを規定するものであった。文字通り、外見が中身を表したのである。服装を意味する fashion は、当時は、そのラテン語の語源 factio (=making) のとおり、「造る」という動詞の意味でも用いられた。人物の成型も fashion という語で表されたのである。² 華やかな服装をして、gallant と称されることもそうした自己成型のひとつのタイプを表しているといえる。典型的な人物像としての gallant を描いたものとしては、Thomas Dekker の小冊子、*The Gull's Hornbook* (1609) が、当時のロンドンの gallant なる洒落者たちの様子を風刺的に描いたものとして有名である。また Sir Thomas Overbury の *Characters* (1622) でも、gallant は服装を見せびらかす気取り屋として批判的に描かれている (260-61)。17世紀において、gallant は服装を見せびらかす気取り屋としての側面がとくに強調されているといえる。³

しかしながら、Shakespeare においては、gallant は風刺の対象としての「華美な服装をした」人物ばかりを指してはいない。gallant が名詞として用いられ、人物を表す場合には、華美な服装をした人物のことを指している場合も多いが、形容詞の場合は、gallant は主に、「勇敢な」という意味で使われており、「華美な服装をしている」という意味で用いられている例は少ない。Shakespeare において gallant はその外面よりも内面を指していることが多いといえる。そもそも形容詞の gallant を

「騎士のように勇敢な」という意味で最初に用いたのが Shakespeare である。当時の社会そのものを描いているという点では、Thomas Dekker や Thomas Middleton, また Ben Jonson などの市民喜劇の用例を調べることも重要かつ必要である。しかし、gallant の 2 重性を探るためには、まずは、Shakespeare の用例を確認しておく必要がある。それではまず、gallant の当時の意味を OED で確認しておきたい。

gallant の当時の用法

OED によれば、形容詞、および名詞の gallant には次のような意味がある。(見出し番号は OED の番号で、() 内は初出の年である。+は現在使われない意味である。)

A. 形容詞

1. gorgeous or showy in appearance, finely-dressed, smart. (c1420)
- +1b. of language: full of showy expression, ornate, specious. (1484)
- +2. of woman: fine-looking, handsome. (1552)
- +3. suited to fashionable society; indulging in social gaiety or display; attractive in manners, polished, courtier-like. (1500)
4. *loosely*, as a general epithet of admiration or praise: excellent, splendid, fine, grand. (1539)
- 4b. often used as an admiring epithet for a ship: noble, stately. (1583)
5. chivalrously brave, full of noble daring. (1596)
- 5b. used, esp. in parliamentary language, as the conventional epithet of a military or naval officer. (1875)
6. markedly polite and attentive to the female sex. (1680)
7. of or pertaining to (sexual) love, amorous, amatory (1673)
8. 複合語 +gallant-springing=growing up in beauty (Schmidt) (1594)

B. 名詞

1. a man of fashion and pleasure: a fine gentleman (sometimes with added notion of A5: chivalrously brave, full of noble daring) (1383)

- +1b. of a woman: a fashionably attired beauty. (1580)
- +2. used in the vocative as a courteous mode of address, esp., in plural; =‘gentlemen.’ Also with playful or semi-ironical tone, as in *this gallant* =‘this fine fellow’. (1470)
- +2b. (pl) one’s (military) followers. (1526)
3. one who pays court to ladies, a ladies’ man. Also a lover, in a bad sense, a paramour. (1450)
4. given by Gerarde as the name of a kind of Anemone. (1597)
- +5. naut. a name formerly applied to ‘all flags borne on the mizen-mast.’ (初出記載なし)

OED には、以上が記載されている。Shakespeare の作品の下限を John Fletcher との合作による *The Two Noble Kinsmen* とすると、その年代は Harbage に倣えば 1613-14 年となる (104)。それ以前に初出例があるものは、形容詞 1-5 の意味、名詞 1-4 の意味である。それらの意味にはまた、16 世紀半ばの用例があるので、Shakespeare は作品執筆の際に gallant にこれらの意味があることを知っていたと考えられる。

そうすると Shakespeare が知っていたと考えられる形容詞の 5 つの意味は、次の通りである。

- (1) 見た目が豪華で華やか・派手なこと、美しく着飾っていること、きちんとして洗練されていること (1b) (言語に関しても同じように) 表現が大げさで、美文調であり、まことしやかなこと
- (2) (女性について) 顔立ちが整って、りりしく美しく魅力的なこと
- (3) 社交界にふさわしいこと、社交界の陽気な浮かれ騒ぎや誇示にふけり、礼儀作法が洗練され宮廷人らしい魅力を備えていること (OED の用例から、これが狩やカード・さいころ遊びなどを指していることがわかる⁴⁾)
- (4) 賞賛の一般的な形容として「すばらしい」ということ (4b) (船に関して)「すばらしい」こと
- (5) 騎士のように勇敢で、気高い勇氣に満ちていること

これらは大きく分けて、外見的な美しさ、とくに華やかさを形容するもの (1-3 の意味) と、内面的

な美德を形容するもの（5の意味）の2つに分けられる。もちろん外見的な美しさと内面的な美德は相反するものではなく、むしろ Shakespeare の時代にあっては内面と外面は一致しているのが望ましかった。また騎士が華やかな鎧や羽飾りを身につけていたことを考えれば、5の意味の「騎士の如くに勇敢である」ことと、1の意味の「服装の華やかさ」も相反するものではない。騎士が宮廷人でもありえることを考えれば、3の意味の礼儀作法の心得とも相反するものではない。事実、chivalrous は「騎士道に適う」ということと同時に宮廷恋愛にあるような「女性に優しく礼儀正しい」という騎士道精神も意味する。当面は1-3の「外見」に関する意味と5の「勇敢さ」を示す意味の2つに形容詞 gallant の意味が大別できることと、そこから一般的な賞賛にも当てられることを確認しておく。

ここで、ひとつ重要なことは、形容詞5の意味の用例の初出が、Shakespeare の *Henry IV, Part 1* (1596) からであり、Shakespeare が gallant に「騎士のように勇敢な」という意味を付したことである。

名詞に関しては、初出の記載のない5番目の意味を除いて、すべて Shakespeare が用いた可能性がある。これも意味をまとめておけば、次のようになる。

- (1) 流行と快楽を追う男。優れて地位の高い人・ときに加えて騎士の如くに勇敢な人 (1b) すばらしい服装をしている美人
- (2) 丁寧な呼びかけ、ときに少しからかう調子 (2b) (軍隊で) 部下
- (3) 女性に求愛する男、女たらし、ときに愛人、情夫
- (4) アネモネの一種の花の名前

形容詞では2つに大別されていた意味が、名詞では1つの括りで纏められている。名詞 (1383初出) のほうが形容詞 (1番目の意味が c1420初出) よりも早くに使われており、最初はファッションナブルで多分に騎士の如くに勇敢な人物を gallant と呼んだのであり、これらをまとめた *OED* の定義に従えば、外見の華やかさと勇敢さは、かつては結びついていたことを暗示する。さらに、「女性に懇懇な男」の意味が名詞にはすでにあったことが示されている。Shakespeare の *Love's Labour's Lost* で Berowne が Boyet のことを “this gallant pins the

wenches on his sleeve.” (5.2.321) と述べるときは、この意味で用いていると考えられる。しかし、この意味が、形容詞や動詞でも使われるようになるのは17世紀になってからである。

動詞としての gallant の意味として、*OED* は次の意味を挙げている。

1. to play the gallant or dandy, to “cut a dash” (1608)
2. to make gallant or fine, to deck out in a showy manner. (1614)
3. to play the gallant, flirt, dally with. (1744)
4. to play the gallant to (a woman), pay court or lover-like attentions to, flirt with. (1672)
- 4.b. to caress (a hand) gallantly. (1672)
5. to act as cavalier or escort to (a lady), to attend or conduct (her) to some place. (1690)

Shakespeare の時代で使われた意味は1, 2のみである。ただし Shakespeare 自身は、動詞としては用いていない。動詞の意味を見ていくと、形容詞の5番目の意味のような肯定的な「勇敢さ」を意味するものがない。「人目を引くために飾り立てる」(1, 2) という服装等に焦点がある意味と、「女性に懇懇な態度を取る」(3-5) ことに関連した意味があるのみである。

形容詞と動詞において、17世紀に至って初めて「女性に対して懇懇な」という意味が現れたことは、17世紀における gallant の主たる意味を暗示しているといえる。そのことを語源に言及することで少し補足しておく。

OED によると、gallant の語源であるフランス語の形容詞の初期の意味は、次の3つである。(1) dashing, spirited, bold. (2) gay in appearance, handsome, gaily attired. (3) fitted for the pleasures of society, attractive in manners, courteous, polished. (*OED* 見出し 3, 6, 7 に相当)。(1)の意味はフランスでは廃れたが、近代英語では主たる意味の源になっている (*OED* 形容詞見出し 4, 5 に相当)。(2)は現代英語ではほとんど廃れたが、英語に導入された意味としては早いといえる (*OED* 見出し 1, 2 に相当)。(3)の意味は、特に「女性に対して丁寧である」(politely attentive to women) とか「恋愛の」(amorous, amatory) という意味を生じることになり、それが17世紀の英語に取り入れられることになる (*OED* 見出し 6, 7 に相当)。

「女性に慇懃な」という意味が形容詞と動詞に導入されるのが王政復古以後であることから、おそらく、王政復古による Charles II のフランスからの帰還とともに、gallant の言葉の意味に新たなものが加えられ、それが17世紀における gallant のイメージとなったことが予想される。それは16世紀まで、gallant が持っていた「勇敢な」の意味が徐々に薄れて、「服装を見せびらかす」や「女性に慇懃な」というイメージに変化しつつあることを示唆している。

最後に副詞 gallantly の意味も、合わせて確認しておく。OED の見出しと定義は次の通りである。

1. in gorgeous style, showily. (1552)
2. in an excited manner, splendidly, finely (1552)
3. in a brave or spirited manner, courageously, heroically. (1590)⁵
4. with courtesy or politeness, esp. in the exaggerated style of a gallant or courtier. (1611)

1-3 は、16世紀に副詞でも「派手な格好・服装で」、「勇敢に」という意味で使われていたことを示しており、これらの意味が、gallant の16世紀の意味としては、中心的な意味・イメージであったことを示唆する。とくに3番目の「勇敢に」の意味は Shakespeare が初出であり、この意味が Shakespeare にとって重要であったことを確認させる。逆に、4の「仰々しいほどの慇懃さで」を表す意味で、Shakespeare が使った例は見当たらない。理由としては、すでに晩年期で作品数が少ないことと、もともと副詞の用例が少ないことが考えられる。

Shakespeare 語彙辞典における gallant の解釈

OED から、Shakespeare の同時代における gallant の意味を絞ることはできたが、Shakespeare に関してはすでにいくつかの語彙辞典がある。これらが gallant をどういう意味に解釈しているかということも、確認して整理しておきたい。代表的なものとして、Onions, Schmidt, Crystal のものを取り上げる。⁶

1. C. T. Onions, *A Shakespeare Glossary* (1911). これは OED の副産物でもあり、定義などは記載が簡略化されてはいるが、基本的に同じであ

る。Shakespeare が用いたと考えられる意味に限定されており、また現代英語でもよく使われるものは除かれている。Onions の gallant の項は次のようになっている。

形容詞 (orig.= showy in appearance, smart)

1. loosely used as a general epithet of praise = excellent, splendid; of a ship = noble, stately.
2. chivalrously brave, full of noble daring (the common S. use).

名詞 (2. a courteous mode of address)

1. a man of fashion and pleasure: a fine gentleman.
2. pl. used as a vocative, =gentlemen.
3. ladies' man, a lover.

形容詞のところで、Onions は、OED では最初の意味としてあるものを、但し書きとして残している。これは Shakespeare の形容詞の用法がやや当時でも特殊であり、もとの意味を示しておく必要があると考えたからであろう。そして、2に「シェイクスピアでの普通の用法」という説明を加えている。Onions の解釈では、Shakespeare における gallant の用法は「騎士のように勇敢な」という意味が中心である。

奇しくも Onions が *cavaleiro* の項の説明で、gentleman trained in arms; gay, sprightly military man, (hence) gallant と述べているように、gallant は *cavaleiro*、つまり cavalier と結びつく。

名詞に関しては、OED1b の「着飾った美人」の意味を除いて、Shakespeare はほぼ用いているとしている。ただし、OED との違いは、1で「騎士のような」という意味が添加されることもあるというものを削った点と、2の意味が「からかい、皮肉」もある、というのを削った点である。

2. Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon* (1901). Shakespeare のすべての語を網羅して、その意味を示し多くの引用例、引用箇所を挙げたもので、今でも貴重な参考文献である。gallant の項は次のようである。

形容詞

- (1) high-spirited, chivalrous (威勢のよい・血気盛んな、騎士道にかなった・勇敢な) (例) Pilgr.216; LLL.5.1.; As.1.2.; All.3.5,4.3.; KJ.5.2.; H4A.1.1.,3.2.,4.4.,5.3.; H4B.3.2.; H5.3.5.,3.

6.,3.7.,4.2.,4.7.,4.8.; H6C.5.1.; Troil.1.2.,1.3.,3.3.,4.5.; Tit.4.2.; Rom.3.1.,3.5

- (2) splendid, fine, noble, beautiful (すばらしい, 気高い, 美しい) (例) Tmp.5.1.; LLL.2.1.; H8.3.2.; Tit.1.1.; Cym.3.4.; Per.5.1.; MND.4.1.; As.1.3.; Win.1.1.; KJ.5.2.; H4A.1.1.; JC.4.2.,5.1.

名詞: a person of rank and mettle (高い地位にあり勇氣・気骨のある人物) (例) Ado.3.4., H5.4.2.,H6B.5.3.

Hence = a spruce fellow, a young blood, *mostly used ironically* (服装がこぎれいな男, 若いおしゃれな元気な男・道楽者, たいていは皮肉として用いられる) (例) Tmp.1.2., Wiv.2.1.,3.2., Ado.4.1, LLL.5.2., As.1.2.,2.2., Shr.3.2.,4.3, R2.5.3., H6C.5.5., H8.1.3., Hml.4.7., Oth.2.3. Per.4.2.

Used as a familiar compellation (親しい呼びかけとして) (例) Ado.3.2., H4A.2.4., H6A.3.2.

形容詞に関しては, Schmidt の解釈でも, Shakespeare は *OED* の 1-3 の意味 (「華美な服装をする」) では使っておらず, 4, 5 (「すばらしい, 騎士のように勇敢な」) の意味しかないと解釈されている。また, すべての用例が挙がっているわけではないが, Schmidt (1) の chivalrous の例が多く挙げられており, Onions 同様, この意味が Shakespeare の中心的用法と解釈している。

名詞の意味としては, *OED* がひとつに括った 1 番目の意味を, “Hence” で 2 つに分けて, 作品からの用例を区別している。

また, 名詞には「服装がこぎれいで, 洒落者」という意味の用例が多くあり, Shakespeare が形容詞と名詞で gallant の意味を使い分けていたことを示している。つまり, Schmidt の解釈では, Shakespeare は gallant を, 形容詞では主に「騎士のような, 気高い, 威勢がよい」という意味で使っており, 名詞では主に「洒落者, 元気者」という意味で使っている。

副詞 gallantly

- (1) bravely, nobly (例) H5.3.6.; Ant.4.4.
(2) splendidly, finely (例) H4A.4.1.

副詞は *OED* 2, 3 にあたる意味が取られている。gallantly を「服装・外見」に関するものには使っていないという解釈である。

名詞 gallantry.

a body of gallants (大勢の gallant) (例) Troi.3.1. gallant の縁語として載せてあり, 一例だけである。

なお, *OED* では, gallantry の初出は Shakespeare からである。意味は, Gallants collectively; gentry, fashionable people である。ただし, *OED* に掲載されている用例を見る限り, Shakespeare はあくまで, 単なる集合名詞として用いており, gallantry が fashionable people といった服装に関連する意味になるのは 17 世紀後半の用例からである。

3. David Crystal and Ben Crystal, *Shakespeare's Words* (2002). 言語学者として著名な David Crystal と息子で俳優の Ben Crystal との共著によるもの。Schmidt ほど網羅的ではないが, 一般読者にも Shakespeare を読むのに十分な情報を収めたもの。gallant の項は次のようになっている。

名詞

- (1) fine gentleman, man of fashion (例) LLL.5.2.; As.1.2.; H6A.3.1.; Ado.3.4.; R2.5.3.; Tmp.1.2. (呼びかけとして) often ironic or sarcastic (例) Ado.3.2.; Wive.3.2.; H6A.3.2.

形容詞

- (1) fine, splendid, grand (例) H8.3.2.; JC.5.1.; Tit.1.1., 4.2.
(2) showy, fancy, ostentatious (例) AW.4.3.
縁語 gallantry: gallants, nobility, gentry (例) Troi.3.1.

Crystal の挙げている名詞の意味には, Onions, Schmidt の当時は外典とされ, 現在は Shakespeare の手が入っていると認められた作品からの例があるが, 海洋用語としての例なので, ここでは省いた。以上の辞書の意味から, Shakespeare が用いたと考えられる gallant の形容詞・名詞の意味をまとめて図示すると次の頁の表のようになる。

Onions と Schmidt の解釈を比較すると, 両者はそれほど違いがないことがわかる。両者とも, Shakespeare は gallant の意味を, 形容詞では主に「騎士のような, 気高い, 威勢がよい」という意味で使っており, 名詞では主に「洒落者, 元気者」という意味で使っていた, と解釈する。これは, Onions が名詞の意味から「騎士のような, 気高い, 威勢がよい」という *OED* の但し書きをはずしたこ

	OED	Onions	Schmidt	Crystal
形容詞	gorgeous or showy in appearance	showy in appearance		showy, fancy, ostentatious
	suited to fashionable society ; courtier-like			
	excellent, splendid	excellent, splendid	splendid, fine, noble, beautiful	fine, splendid
	chivalrously brave	chivalrously brave, full of noble daring (the common S. use)	high-spirited, chivalrous	
名詞	a man of fashion and pleasure: a fine gentleman (chivalrously brave)	a man of fashion and pleasure	a person of rank and mettle / a spruce fellow, a young blood, <i>mostly used ironically</i>	fine gentleman, man of fashion
	gentlemen (vocative) (Also with playful or semi-ironical tone)	Gentlemen	as a familiar compellation	as a address
	one who pays court to ladies	ladies' man		

とと一致する。また呼びかけに関しては、両者とも皮肉な調子が含まれることがあるという *OED* の解釈を残していない。ただし、Schmidt は名詞の「洒落者、元気者」といった用法の際に、ほとんどが皮肉的な意味で使われているとしている。Crystal ではその意味が、呼びかけで用いられた場合に、しばしば皮肉として用いられると述べている。

結論として3つを比べて大きな見解の違いはないといえる。Shakespeare の *gallant* の用法をまとめると次のようになる。形容詞では「騎士のような、勇敢な、威勢がよい」といった意味で用いられる。名詞の場合には「洒落者、元気のいい男」といった意味で用いられる。そして、名詞の場合には皮肉な調子で用いられる場合がある。ただし、Crystal は、形容詞の場合も、*OED* の最初の意味に近い、*showy, fancy, ostentatious* 「外見を華美に見せびらかす」といった意味が使われているとする。

これら、*OED* と Shakespeare の英語を扱った辞書における *gallant* の意味を整理することで、Shakespeare の *gallant* の用法の見取り図は描けたと思う。これをもとに、これから Shakespeare の *gallant* の用例を、実際にいろいろな角度から検討してみることにする。

Shakespeare における *gallant* の用法

Shakespeare におけるすべての用法を調べるた

めに、電子テキストを用いて、統計を取った。

統計の元としたテキストは Project Gutenberg のものを利用し、見出し語、品詞の別、作品、ジャンル、年代、用例、用例の使用されている幕場、用例の使われているコンテキストなどをファイルメーカーでデータベース化した。それをもとに、意味の分類、皮肉のかどうか、*gallant* の対象、その服装などを分析した。

用例は全部で74例。見出しの品詞は次の通り。形容詞 *gallant* 44例、名詞 *gallant* 24例、名詞 *gallantry* 1例 (Tro)、名詞 *topgallant* 1例 (Rom)、副詞 *gallant* 1例 (MND)、副詞 *gallantly* 3例。

作品別の用例数は次頁の通り。⁷ (作品名の省略は *MLA* に従う。省略表は本文の末尾につけた。ジャンルと年は Harbage の分類に従った。)

個別の作品で多いものは、H5 : 10例、LLL : 7例、1H4 : 7例、Tro. : 6例、AYL : 4例がある。LLL は名詞が4例で最も多い。後の作品は形容詞がほとんどである。

37作品中、用例がないものは9作品。約1/4の作品で *gallant* の用例がない。これが *gallant* の用例頻度として多いか少ないかは他の作家を調べないとわからないが、*gallant* と意味・用法の近い *brave* (および *bravely*) の Shakespeare の用例数を調べてみても、用例数は作品によって大きく分かれ、用例が0ないし1の作品も多く見られた。ほかに *gallant* の用法で目についたことは、四大悲劇にお

作品	形	名	副	計	ジャンル	年
1H6		1		1	歴史劇	1590
2H6		1		1	歴史劇	1590
3H6	1	1		2	歴史劇	1591
Jn	2			2	歴史劇	1591
Err				0	喜劇	1592
R3	1			1	歴史劇	1592
Shr		2		2	喜劇	1592
TGV				0	喜劇	1593
Tit	2			2	悲劇	1594
LLL	3	4		7	喜劇	1595
R2		1		1	歴史劇	1595
MND	1		1	2	喜劇	1596
MV				0	喜劇	1596
Rom	2	1		3	悲劇	1596
1H4	5	1	1	7	歴史劇	1597
2H4	1			1	歴史劇	1597
Wiv		2		2	喜劇	1597
Ado		3		3	喜劇	1598
H5	9		1	10	歴史劇	1598
JC	2			2	悲劇	1598
AYL	2	2		4	喜劇	1601
Ham		1		1	悲劇	1601
TN				0	喜劇	1601
Tro	5	1		6	悲劇	1602
AWW	3			3	喜劇	1603
MM				0	喜劇	1604
Oth		1		1	悲劇	1604
Lr				0	悲劇	1605
Mac				0	悲劇	1606
Ant			1	1	悲劇	1607
Tim				0	悲劇	1607
Cor				0	悲劇	1608
Per	2	1		3	悲喜劇	1608
Cym		1		1	悲喜劇	1609
WT	1			1	悲喜劇	1610
Tmp	1	1		2	喜劇	1611
H8	1	1		2	歴史劇	1613

いて1例しかないほか、Shakespeare の比較的著名な作品において、あまり使われていないことである。

ジャンル別では以下の通りである。

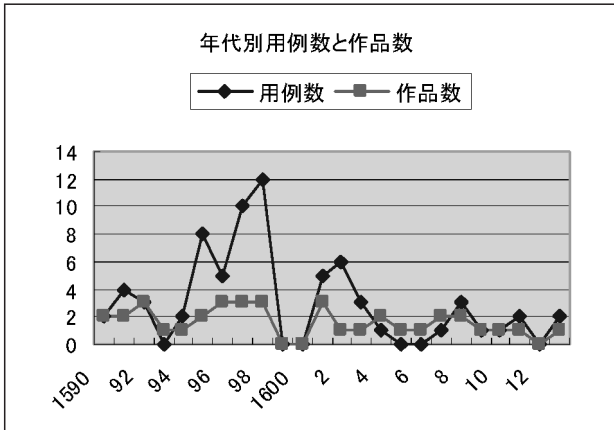
ジャンル	形	名	副	合計	作品/総数
喜劇	10	14	1	25	8/13
悲喜劇	3	2	0	5	3/3
悲劇	11	4	1	16	7/11
歴史劇	20	6	2	28	10/10

ジャンル分けは、異論もあるだろうが、Harbage に従った。総作品数と用例数の比率からすれば、歴史劇において最もよく使用され、悲劇が最も少ない。

また、喜劇では名詞が多く使われ、歴史劇では形容詞が圧倒的に多い。すでに述べたように、名詞の意味は、a man of fashion, fine gentlemen が多く、形容詞では、chivalrously brave の意味が多い。歴史劇で戦闘場面が多いことを考えれば、このことは当然ともいえるが、さらに調べるべきこととして、gallant が使われているときの、武人の服装がどのようなものであったかということが考えられる。劇中のせりふから、武人が華やかな服装で戦場に挑む場合もあれば、ぼろぼろの格好らしきこともある。たとえば Harry が *Henry IV, Part I* で gallantly arm'd と伝えられたときの gallantly は外見のことか、風采のことか、またはその両方なのか、テキストだけでは判断はむずかしい。*All's Well That Ends Well* で、Parolles が、gallant militarist と呼ばれるときは、小心者の Parolles のことを皮肉で、「勇敢な兵士」といっているとも、その見かけだけの飾り立てた格好を指しているとも取れる。姿を想像するには、当時の肖像画で、貴族が時代錯誤の騎士の姿に扮して好んで描かせた背景もある。(たとえば、George Clifford, 3rd Earl of Cumberland は、Elizabeth 女王からもらったダイヤのついた手袋を頭部に飾った肖像画を描かせている。次の図参照。)



George Clifford, 3rd Earl of Cumberland. By Nicholas Hilliard. c.1590. The National Maritime Museum, Greenwich. (Ashelford, 136)

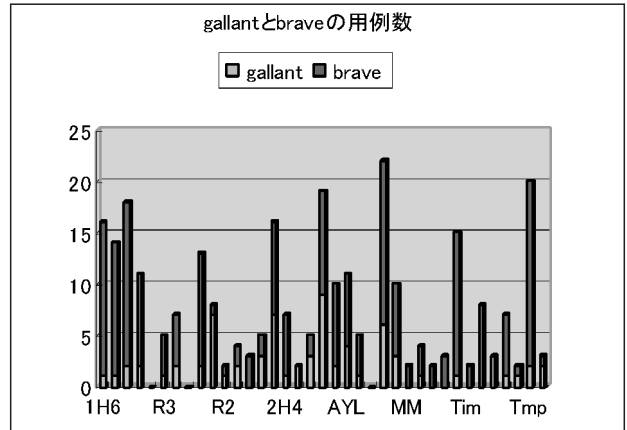


また、特定の作品（歴史劇の H5, 1H4, 喜劇の LLL, AYL, 悲劇の Tro）を除くとジャンルあたりの平均使用頻度は、あまり変わらないことから、ジャンルよりも作品のテーマのほうが、用例数に関係することも考えられる。

次に、年代別には、目立った偏りはないが、中期にやや用例が多い。後期の悲劇の時代になるととくに少ない。また、用例の多い作品と少ない作品が比較的是っきり分かれる。

上のグラフは1590年から1613年まで、年代別に作品数と用例数を示したものである。作品の年代は Harbage によるものである。大体の傾向として中期に用例数が比較的多く、（作品数も少ないが）後期の用例の少ないことがはっきりわかるだろう。実はこの傾向とは逆に、16世紀までは英国の演劇で題名に gallant を冠した作品はなく、17世紀に5作品、18世紀半ばまでに4作品がある。これは17世紀になってから、当時の演劇界でタイプとしての gallant が確立しつつあったことを思わせる。たとえば Shakespeare がこの頃にそういった人物を描いた例としては、*Hamlet* にわずかな場面だけ登場するが、印象的な人物で、やたら帽子を気にする気取った宮廷人 Osric などがいる。⁸ また、年代による用例の意味を見ると Shakespeare の gallant の意味は、中期までは「勇敢な」という意味がほとんどであるのに比べて、後期では一般的な賞賛の「すばらしい」などの意味になっており、この時代に gallant が「勇敢な」という意味では使われなくなりつつあることを示唆する。

これについては、gallant と brave の用例を合わせて見た場合に、興味深いことがわかる。brave は「勇敢な」という意味が主だが、gallant 同様に「派手な服」の形容や「すばらしい」という意味でも使



われる。この brave が Shakespeare の作品で多く用いられるのが、H6・3部作（15, 13, 16例）、Jn（9例）、Tit（11例）、H4・2部作（9, 6例）、H5（10例）、Tro（16例）、Ant（14例）、Tmp（18例）である。⁹ 悲劇において両方の語があまり用いられていないのも興味深いだが、さらに興味深いのは、brave の用例が多い初期の作品 *Henry VI*, 3部作で、gallant がほとんど使われていないことである。そこで gallant の用例が多い中期の *Henry IV, Part 1*, *Henry V* の brave の用例数を見ると、*Henry VI*, 3部作ほど多くはない。ただ、brave と gallant を合わせた用例数は *Henry VI*, 3部作とほぼ同じになる。

上のグラフは、gallant と brave の用例を合わせた表である。下部の作品名が一部しかグラフに表示されていないため混乱を招くが、左の3本の高い棒が *Henry VI*, 3部作で、中頃の 2H4 の上の高い棒が *Henry IV, Part 1*, AYL の辺の高い棒が *Henry V*, 一番高いのが *Troilus and Cressida* である。このグラフから読み取れるのは、Shakespeare が最初は「勇敢な」という意味で brave を用いていたのが、中期においては gallant に brave を用いたところにほぼ同じような意味合いで、併用したということである。それが「騎士のように勇敢な」「大胆な」という意味での gallant の用法である。そうするとなぜ Shakespeare は後期の作品 *Antony and Cleopatra* や *The Tempest* では gallant を使わなかったのかという疑問が残る。その答は、中期と後期の中間にある *Troilus and Cressida* では brave の比率がかなり多いながらも、gallant がまだ使われていることが鍵になっているように思われる。中期においては gallant を「騎士のように勇敢な」という意味で用いたが、後期になるにつれ、次第に使われなくなった移行段階が *Troilus* に表れていると考えられ

る。そのことは、gallant の言葉の意味が、Dekker が批判するようなタイプの gallant を指すようになってきて「勇敢な」という意味では使えなくなったのではないかということが考えられる。ちょうど、gallant がタイプとして確立する時期とも一致する。やや大胆な仮説であるが、valour (勇敢な) などの用法との違いや、gallant と brave の類似などを調査することで検証していくことができると考えている。

Shakespeare における gallant の意味－形容詞と名詞を中心に

最後に、Shakespeare の gallant の用法の74例中68例を占める形容詞と名詞の用法からわかることをまとめておきたい。Schmidt と Crystal の gallant の用例を併せると、形容詞 (38例)、名詞 (23例) で61箇所である。68箇所中のほとんどは2人の語彙辞典の用例に挙がっている。一義的に決められないものや、複数の意味が考えられるものなどもあるが、とりあえず、Schmidt と Crystal の分類をもとに、挙げられていない箇所を加えて、各意味の用例数を算出した。¹⁰

形容詞 () 内が用例数

- showy, fancy (1)
- splendid, fine (16)
- chivalrously brave, high-spirited, young blood (27)

名詞 () 内が用例数

- fine gentleman, man of fashion, a young blood (20)
- gentleman (as vocative) (4)

これを一見しても、形容詞では「騎士のように勇敢な」という意味が、名詞では「華やかな男、すばらしい身分高き男」が Shakespeare の gallant の用法の主な意味であることがわかる。

さらに詳しく用例の調査をした結果、現段階で明らかにできたことを次にまとめることとする。

(1) *OED* の gallant の形容詞の 5 番目の意味 “chivalrous” (1596) の初出は正しいか。

形容詞の「騎士のごとくに勇敢な」という意味は *OED* では、Shakespeare の *Henry IV, Part 1* (*OED* は1596年の作品としている) が初出である。そうであれば、それ以前の劇ではその意味では用いてい

ないことになる。しかし Schmidt や Crystal の意味の分類では、それ以前の作品の用例の半数ほどが、high-spirited, chivalrous の意味に分類されている。*OED* は、gallant が副詞的に用いられて「勇敢に」の意味で使われている例として、*A Midsummer Night's Dream* の1590年を初出にしていることから、1590年ごろから gallant が「勇敢な、騎士のような」の意味も併せ持つようになったと考えるのが自然であろう。少なくとも Shakespeare の用法を見る限りは、そのように考えられる。明らかな使用例としてのみ *OED* の初出年代は考えるべきである。

ではなぜ、そのような「騎士としての勇敢さ」の意味を持つようになったかについては、2つの見方ができる。ひとつは広い意味で使われていた「すばらしい」という賞賛の意味が「勇敢な」という意味にも特化して使われるようになったということである。もうひとつは、騎士の華やかな服装が gallant のその形容詞の 1 番目の意味「豪華な装い、美しい衣装」と繋がって、そこから騎士の属性である「勇敢さ」のほうに焦点が移って新たに「騎士のように勇敢な」という意味が付与されたということである。前述したように、当時、貴族は騎士の姿でしばしば肖像画を描かせたし、その衣装も実際の戦闘に用いた鎧よりも、見た目が豪華なものであったと考えられる。しかし、それらの衣装は武装としてはすでに時代遅れであった。gallant の意味する「勇敢さ」は見かけだけのものとして、皮肉の対象となる可能性はそのときからあったといえよう。Falstaff や Pistol に示されるように、見かけは騎士、兵士だが勇気を伴わない輩が輩出していた背景が Shakespeare の用例にも見て取れる。

Pistol の関係する場面は gallant の用例でもあるので、少し詳しく見てみよう。*Henry V* には Pistol を勇敢な男と勘違いする Fluient とそれを否定する Captain Gower のやり取りがある。Fluient が gallant service (3.6.15-16) をした Mark Antony と同じぐらい勇敢な兵士として Pistol を賞賛するが、Captain Gower は Pistol を見て、彼が詐欺師ですりであったことを思い出す。そして続けて、次のように言う。

Why, 'tis a gull, a fool, a rogue, that now and then goes to the wars, to grace himself at his return into London under the form of a soldier. (3.6.67-69)

Dekkerはそのパンフレットで gallant を gull (詐欺) と結び付けているが、ここでも、間接的だが、gallant という語と gull が結びついている。Gower はさらに、この手の男が見掛け倒しで口のうまさまで周りの人を魅了することに憤慨する。この手の男は戦争時の話をたくみに語って、将軍ひげの格好と軍服 (a beard of the general's cut and a horrid suit of the camp) (3.6.76-77) という見かけで人を感服させてしまうのだと。ここにはきらびやかな服装を見せびらかす17世紀の gallant の原型がいるといえよう。

(2) 意味が1つだけではなく、2つ以上重なるところはあるかどうか。

Parolles が gallant militarist と呼ばれるところなどですでに述べたように、gallant の意味が多様に取りうること、意味の重なるところは多く見られる。「勇敢な」と「すばらしい」が重なるのは当然として、単なる賞賛か、とくに騎士のようにすばらしいといっているのかはわからないところはしばしば見られる。そのほかに作品全体との関係で gallant の意味を考えるには、コンテキストを吟味する必要がある。一例を挙げれば、*As You Like It* で、レスラーの Charles から Orlando が young gallant と呼ばれるときには、gallant は無教育の「無鉄砲な若造」というような意味で用いられている。しかし、その後、Ganymede (Rosalind) から、Orlando が「恋する若者」のあるべきスタイルを指南されるとき、観客は、ぼろを着た無鉄砲な若者が、シャツをはだけて恋をうそぶく当世風の若者 (gallant) に変身させられようとしていることに気づかされる。ここには2つの gallant のタイプが並べられている。

(3) gallant の意味が批判的に使われているか、肯定的な意味合いで使われているか。

データベースのコンテキストを検討した結果、gallant がまじめな意味、好意的な意味、敬意の意味で用いられていると考えられるのが、68例のうち38例、皮肉や反語、侮蔑、からかい、反感などを含んでいると考えられるのが30例である。ほぼ、半数近くは皮肉な意味で用いられているが、Dekker など gallant に批判的な発言があるとすれば、Shakespeare はむしろ gallant によい意味も持た

せようともしたと考えられる。

また、批判的な意味もいわゆる、華美な服を着た人物だけでなく、戦場で敵について述べるときの侮蔑であったり、Hotspur など行動が派手でプライドの高い人物に対しての批判的な用例であったりする。前者ではフランス人やフランス関係の場面で、gallant が用いられている。また Hotspur などの場合は、外見を飾ることと同時に、行動の「見せびらかし」に対して gallant が使われているといえよう。

(4) 服装との関係。

本来、gallant は a man of fashion とあるように、華美な服装を自慢する類のものだが、Shakespeare に関しては服装への言及はむしろあるものの、gallant の用法と直接関連付けられている例はあまりない。喜劇などでは、Parolles や Boyet などの服装の記述がわずかにあるが、たとえば gallant Hotspur と称されるが、Hotspur が取り立てて、外見を飾り立てたり、そのような批判がされたりはしていない。服装との関係では、用語だけでなく、次に述べるように、明示されていないが gallant とみなされる人物を調査する必要がある。

(5) gallant と明示されていないが、gallant と関係する人物。

Osric など悲劇でも、gallant に該当するような人物は登場する。ほかにも直接 gallant という言及はないが、服装や行動から明らかに gallant とみなする人物像は多々ある。たとえば、*Love's Labour's Lost* に登場する Armado も典型的な gallant タイプである。16世紀の、Shakespeare の初期の作品における gallant 像は17世紀との比較検討の対象となる。今回は gallant という言葉に限ってまず調べたが、gallant のイメージを探るためには、今後、Middleton などの他の作家の gallant の用法や、gallant という言葉だけでなく、gallant な人物およびその服装を調査する必要がある。

最後に、16世紀までの gallant は、外見よりも武人としての誉れを追った Hotspur や、gallant の内包する2重性の豊かさを象徴していた Falstaff などが主人公であった。しかし17世紀になると、女性を口説くことを主とする着飾った軽佻浮薄とも見える gallant が主人公へと変化してしまう。17

世紀の服装の女性化と重ねて、今後の課題として、さらに gallant の意味の多重性を、服装との関連や他の作家の用法なども視野に入れて、調査分析を進めることで、明らかにしていきたい。

*本研究は、文部科学省「人文学および社会科学における共同研究の整備の推進事業」の支援による服飾文化共同研究拠点（文化女子大学文化ファッション機構）における共同研究（平成20年度採択「演劇論および身体論的視座からの近代初期英国における服飾文化に関する研究」共同研究番号20010、統括者 滝川睦）の平成21年度における成果の一部である。

**Shakespeare からの引用行数は Riverside 版による。

Shakespeare 作品の略表

1H6: *Henry VI, Part 1*
 2H6: *Henry VI, Part 2*
 3H6: *Henry VI, Part 3*
 Jn: *King John*
 Err: *The Comedy of Errors*
 R3: *Richard III*
 Shr: *The Taming of the Shrew*
 TGV: *Two Gentlemen of Verona*
 Tit: *Titus Andronicus*
 LLL: *Love's Labour's Lost*
 R2: *Richard II*
 MND: *A Midsummer Night's Dream*
 MV: *The Merchant of Venice*
 Rom: *Romeo and Juliet*
 1H4: *Henry IV, Part 1*
 2H4: *Henry IV, Part 2*
 Wiv: *The Merry Wives of Windsor*
 Ado: *Much Ado About Nothing*
 H5: *Henry V*
 JC: *Julius Caesar*
 AYL: *As You Like It*
 Ham: *Hamlet*
 TN: *Twelfth Night*
 Tro: *Troilus and Cressida*
 AWW: *All's Well That Ends Well*
 MM: *Measure for Measure*
 Oth: *Othello*

Lr: *King Lear*
 Mac: *Macbeth*
 Ant: *Antony and Cleopatra*
 Tim: *Timon of Athens*
 Cor: *Coriolanus*
 Per: *Pericles*
 Cym: *Cymbeline*
 WT: *The Winter Tales*
 Tmp: *The Tempest*
 H8: *Henry VIII*
 TNK: *Two Noble Kinsmen*

注

¹ *The Free Online Dictionary* より The American Heritage® Dictionary of the English Language, Fourth Edition copyright ©2000 by Houghton Mifflin Company. Updated in 2009. Published by Houghton Mifflin Company. の定義による。Online. Nov. 15, 2009.

<http://www.thefreedictionary.com/gallant>

² Stephen Greenblatt の *Renaissance Self-Fashioning* (1980) 以来, Karen Newman, *Fashioning Femininity and English Renaissance Drama* (1991) など英国ルネサンス期の自己成型が fashioning 抜きでは語られなくなった。

³ 17世紀前半の gallant については, たとえば Aileen Rebeiro, 179-86参照。また17世紀後半の服装の気取り屋としての gallant 批判については, Amanda Bailey が Samuel Vincent の *The Young Gallant's Academy* (1674) を取り上げると同時に, その後の服飾文化の変化についても簡単に言及している (129-31)。

⁴ *OED*, 1548年の用例。“Thei hauke, thei hunt, thei card, thei dyce, thei pastime in theyr prelacies with galaunte gentlemen” (Latimer).

⁵ *OED*にもあるように, テクスト上の問題として, この初出は1590年出版の *A Midsummer Night's Dream* の Quarto 版によるもので, そこでは gallantly ではなく, gallant となっている。そして副詞的な意味で用いられていると解釈されている。gallantly の形では1623年出版の Folio 版の同じ箇所が gallantly になっており, 厳密には gallantly としての初出は1623年である。したがって, 1590年から1623年の間に別の用例で, gallantly がこの

意味で使われていた可能性もある。いずれにしても、gallant に副詞的な「勇敢に」という意味を添えたのは、Shakespeare が最初ということである。

⁶ Shakespeare 作品の省略は、各著書の省略通りである。そのため統一性にやや不備はあるが、原典を参照した際の至便と、混乱を招くことはないとの判断から、あえて統一していない。

⁷ 今回の調査では *Two Noble Kinsmen* ははずした。本来 gallant のイメージからは重要な作品であるが、今回の調査の目的である gallant の用例が 2 例とともに今回の調査の主眼である gallant のイメージとは特に関係ないため、簡便さをとった。

⁸ Osrice がわずかの登場にもかかわらず、忘れがたい人物であるのは、Hamlet との帽子をめぐるやり取りでの的確な人物イメージ造形と共に、帽子という視覚的要素も大きいと考えられる。gallant の華美な衣装と大げさな作法を、Shakespeare は見事に捉えている。なお、Harbage の *Annals* には、この頃、Osrice という劇の記録が残っている。

⁹ brave も Project Gutenberg のテキストから算出した。ただし、bravely も含めた数である。

¹⁰ Schmidt, Crystal に挙がっている例は次の通り。
形容詞

Showy: AWW. 4.3. (1例)

Splendid:

Tmp.5.1.;LLL.2.1.;H8.3.2.;Tit.1.1.;Cym.3.4.;Per.5.1.;MND.4.1.;As.1.3.;Win.1.1.;KJ.5.2.;H4A.1.1.;JC.4.2.,5.1. (13例)

High-spirited,chivalrous:

LLL.5.1.;As.1.2.;All.3.5,4.3.;KJ.5.2.;H4A.1.1.,3.2.,4.4.,5.3.;H4B.3.2.;H5.3.5.,3.6.,3.7.,4.2.,4.7.,4.8.;H6C.5.1.;Troil.1.2.,1.3.,3.3.,4.5.;Tit.4.2.;Rom.3.1.,3.5 (24例)

名詞

Fine gentleman, man of fashion, a young blood:

Ado.3.4.,H5.4.2.,H6B.5.3/Tmp.1.2.,Wiv.2.1.,3.2.,Ado.4.1,LLL.5.2.,As.1.2.,2.2.,Shr.3.2.,4.3,R2.5.3.,H6C.5.5.,H8.1.3.,Hml.4.7.,Oth.2.3.Per.4.2.H6A.3.1. (19例)

As an address:

Ado.3.2.,H4A.2.4.,H6A.3.2.,Wive.3.2. (4例)

¹¹ OED には、gull-gallant という見出しがある。1613. Purchas, *Pilgrimage* ix. ii. 826. からの用例で、「にせの gallant」というような意味と考えられる。

引用文献

- Ashelford, Jane. *Dress in the Age of Elizabeth I*. London: B. T. Batsford, 1988.
- Bailey, Amanda. *Flaunting: Style and the Subversive Male Body in Renaissance England*. Toronto: U of Toronto P, 2007.
- Crystal, David, and Ben Crystal. *Shakespeare's Words: A Glossary and Language Companion*. London: Penguin, 2002.
- Dekker, Thomas. *The Gull's Hornbook*. 1609. BiblioBazaar Reproduction Series. Ed. R. B. McKerrow. London: Alexander Morning. 1905.
- Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning: from More to Shakespeare*. Chicago: U of Chicago P, 1980.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Revised by S. Schoenbaum. 3rd. ed. Revised by Sylvia Stoler Wagonheim. London: Routledge, 1989.
- Newman, Karen. *Fashioning Femininity and English Renaissance Drama*. Chicago: U of Chicago P, 1991.
- Onions, C. T. *A Shakespeare Glossary*. 1911. Tokyo: Kinokuniya, 1979.
- Overbury, Sir Thomas, (and Others). *Characters*. 1622. Barnabe Riche Society Publications 15. Ed. Donald Beecher. Ottawa: Dovehouse, 2003.
- Ribeiro, Aileen. *Fashion and Fiction: Dress in Art and Literature in Stuart England*. New Haven: Yale UP, 2005.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. 3rd. ed. 2 vols. Revised and Enlarged by Gregor Sarrazin. New York: Dover, 1971.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton, 1974.

(2009年11月20日受付)

(2009年12月22日受理)